

各関係機関・団体長 様

愛媛県病害虫防除所長

病害虫発生予察情報について（送付）

このことについて、2 月の予察情報を送付します。

病害虫発生予報（2 月）

令和 8 年 1 月 30 日  
愛 媛 県

1 予報の概要

作物名	病害虫名	発生量	その他
冬春トマト	灰色かび病 タバココナジラミ オンシツコナジラミ	やや少～並 並 並	
冬春きゅうり （促成栽培）	黄化えそ病 べと病 灰色かび病 <b>タバココナジラミ</b> オンシツコナジラミ	並 やや少～並 やや少～並 <b>多</b> 並	
冬春いちご	うどんこ病 灰色かび病 ハダニ類 アブラムシ類 アザミウマ類 タバココナジラミ オンシツコナジラミ	やや少～並 少～やや少 並 少 やや少 並 やや少	
たまねぎ	白色疫病	少～やや少	

2 気象予報（高松地方气象台）

1 か月予報（令和 8 年 1 月 22 日発表）の解説

向こう 1 か月の天候の見通し 四国地方（1 月 24 日～2 月 23 日）

< 1 か月の平均気温・降水量・日照時間 >

	平均気温（1 か月）	降水量（1 か月）	日照時間（1 か月）
四国地方	低 40 並 40 高 20% 平年並か低い見込み	少 50 並 30 多 20% 少ない見込み	少 20 並 40 多 40% 平年並か多い見込み

< 予報のポイント >

- ・寒気の影響を受けやすい時期があるため、向こう 1 か月の気温は、平年並か低いでしょう。
- ・低気圧の影響を受けにくいいため、向こう 1 か月は降水量が少ない状態が続くでしょう。また、日照時間は平年並か多いでしょう。

3 病害虫の発生予想

野 菜

(1) 黄化えそ病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容 発生量：促成栽培 並

イ 予報の根拠

(ア) 1 月中旬の促成栽培の調査では、発生を認めていない。また、媒介虫のミナミキイロアザミウマの発生も認めていない。

- (イ) 気象予報では、気温は平年並か低いとされており、媒介虫のミナミキイロアザミウマは現在の発生傾向が続くものと見られる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 発病株は直ちに抜き取り適切に処分する。  
(イ) 媒介虫の卵・蛹には薬剤の効果が劣るので、発生圃場では発生に応じて2～3回防除する。  
(ウ) 媒介虫は雑草等でも増殖するので、圃場内の除草を行う。  
(エ) 今後定植予定のハウスでは媒介虫の侵入・分散を防ぐため、ハウス開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下が望ましい）を設置する。また、紫外線除去フィルムを組み合わせるとさらに効果的である。

(2) ベと病（冬春きゅうり）

ア 予報の内容      発生量：促成栽培 やや少～並

イ 予報の根拠

- (ア) 1月中旬の促成栽培の調査では、平年並の発生である。  
(イ) 気象予報では、気温は平年並か低い、降水量は少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 換気を行い、ハウス内の除湿に努める。  
(イ) 草勢の低下は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。  
(ウ) 老化葉や発病葉は、早めに除去する。  
(エ) 発病初期の防除に重点を置き、薬剤が葉裏の菌叢に十分かかるよう散布する。

(3) うどんこ病（冬春いちご）

ア 予報の内容      発生量：やや少～並

イ 予報の根拠

- (ア) 1月中下旬の調査では、葉、果実ともに平年並の発生である。  
(イ) 気象予報では、気温は平年並か低い、降水量は少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 伝染源となる発病葉・果実、古葉はできる限り除去し、通風と薬剤の付着性を高める。  
(イ) 果実発病が中心となるため、発病初期の防除に重点を置く。  
(ウ) 薬剤散布に当たっては展着剤を加用し、葉裏や芽の間隙部に薬剤が付着するよう散布する。

(4) 灰色かび病（冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご）

ア 予報の内容      発生量：冬春トマト やや少～並  
                         冬春きゅうり（促成栽培） やや少～並  
                         冬春いちご 少～やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 1月中下旬の調査では、冬春トマトは平年並、冬春きゅうりは発生を認めていない、冬春いちごはやや少の発生である。  
(イ) 気象予報では、気温は平年並か低い、降水量は少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 天気の良い日は換気を行い、ハウス内の除湿に努める。  
(イ) 過繁茂や軟弱な生育は発病を助長するので、適正な肥培管理に努める。  
(ウ) 発病果や枯死茎葉は伝染源となるため、早めに除去する。

(5) 白色疫病（たまねぎ）

ア 予報の内容      発生量：少～やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 1月中下旬の早どり栽培を対象とした調査では、発生を認めていない。  
(イ) 気象予報では、気温は平年並か低い、降水量は少ないとされており、発生にやや抑制的である。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察を十分行い、早期発見に努める。特に、毎年発生している圃場では注意する。
- (イ) 排水不良の圃場で発生が多いため、降雨後の排水に努める。
- (ウ) 発病葉や枯死した葉は感染源となるので、適切に処分する。
- (エ) 本病原菌は水媒伝染のため、降雨前後の防除が重要となる。
- (オ) たまねぎの葉は薬剤の付着性が悪いため、展着剤を加用し散布する。

(6) ハダニ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：並

イ 予報の根拠

- (ア) 1月中下旬の調査では、平年並の発生であるが、寄生株率の高い圃場も見られる。
- (イ) 気象予報では、気温は平年並か低いとされており、現在の発生傾向が続くものと見られる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察を行い早期発見に努め、低密度時に防除する。
- (イ) 薬剤は、薬液が葉裏までかかるよう散布する。
- (ウ) 同一系統の薬剤の連用を避け、気門封鎖剤を含む系統の異なる薬剤をローテーション散布する。
- (エ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチ等への影響を考慮する。また、天敵を導入している圃場では、活動に影響の少ない薬剤を選択する。

(7) アブラムシ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：少

イ 予報の根拠

- (ア) 1月中下旬の調査では、少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は平年並か低いとされており、現在の発生傾向が続くものと見られる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察を行い、早期発見に努め、発生が認められたら早めに防除する。
- (イ) 薬剤の選択に当たっては、ミツバチ等への影響を考慮する。また、天敵を導入している圃場では、活動に影響の少ない薬剤を選択する。

(8) アザミウマ類（冬春いちご）

ア 予報の内容 発生量：やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 1月中下旬の調査では、寄生花率、1花当たりの寄生虫数ともにやや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は平年並か低いとされており、現在の発生傾向が続くものと見られる。

ウ 防除上の注意

- (ア) 圃場観察を行い、早期発見に努め、発生が認められたら早めに防除する。
- (イ) 雑草等でも増殖するので、圃場内外の除草を行う。
- (ウ) ハウス開口部に防虫ネットを被覆し、成虫の侵入抑制を図る。

(9) コナジラミ類（冬春トマト、冬春きゅうり、冬春いちご）

ア 予報の内容

発生量：冬春トマト タバココナジラミ 並 オンシツコナジラミ 並  
冬春きゅうり（促成栽培） タバココナジラミ 多 オンシツコナジラミ 並  
冬春いちご タバココナジラミ 並 オンシツコナジラミ やや少

イ 予報の根拠

- (ア) 1月中下旬の調査では、冬春トマトはタバココナジラミは並、オンシツコナジラミは発生を認めていない。冬春きゅうりではタバココナジラミは多、オンシツコナジラミは発生を認めていない。冬春いちごではタバココナジラミは平年並、オンシツコナジラミはやや少の発生である。
- (イ) 気象予報では、気温は平年並か低いとされており、現在の発生傾向が続くものと見られる。

#### ウ 防除上の注意

- (ア) 薬剤の散布に当たっては、葉裏にも薬剤が付着するように散布する。
- (イ) 本虫は、多くの植物に寄生するため、ハウス内の除草を行う。
- (ウ) コナジラミ類はトマトやきゅうりでは、ウイルスを媒介するので注意する。
- (エ) 今後定植予定のハウスでは、コナジラミ類の侵入・分散を防ぐため、ハウス開口部に防虫ネット（目合い 0.4mm 以下が望ましい）を設置する。また、トマトでは紫外線除去フィルムを組み合わせてとさらに効果的である。

#### 【病害虫発生予察情報】

愛媛県病害虫防除所ホームページでご覧になれます。

ホームページアドレスは、<https://www.pref.ehime.jp/site/byocyubojou/>

#### 【農薬使用時の注意】

- ◎農薬の選定にあたっては、農薬取締法に基づき登録された農薬から選定しましょう。
- ◎農作物の安全性を確保するため、農薬の使用にあたっては、適用作物、使用回数、使用時期、使用濃度、使用量、使用方法等の使用基準を遵守しましょう。
- ◎病害虫等の発生を的確に把握し、適時適切な経済防除に努め、農薬や労力等の低投入を図るとともに、低毒性農薬を使用しましょう。
- ◎農薬による防除のみに頼らず、耕種的防除法、物理的防除法及び天敵導入等を積極的に取り入れた総合防除を推進しましょう。
- ◎同一薬剤の連用は耐性菌、抵抗性害虫の出現や助長をまねくので、農薬のローテーション使用を心掛けましょう。
- ◎農薬の使用にあたっては、当該散布場所の地形、当日の気象、養蚕、養蜂、その他の環境条件を考慮し、周辺環境に影響の少ない薬剤を選定するとともに、危害の未然防止や環境の保全に努め、農薬事故防止対策を徹底しましょう。
- ◎農薬を使用する際、農薬のラベルに記載された登録内容、使用上の注意事項等を遵守し、農薬の散布にあたっては、農薬の種類に応じた保護具を必ず装着しましょう。
- ◎農薬の保管管理や取り扱いに注意し、紛失、盗難等の未然防止を図りましょう。